



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ストレプトマイシンとツベルクリン併用に関する実験的研究   |
| Author(s)        | 若井, 喜久哉; 堀尾, 行彦; 森川, 和雄   |
| Description      |   |
| Citation         | 結核の研究, 1, 107-108   |
| Issue Date       | 1954-02   |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/26555">https://hdl.handle.net/2115/26555</a> |
| Type             | departmental bulletin paper   |
| File Information | 1_P107-108.pdf  |



## ストレプトマイシンとツベルクリン併用に關する 實驗的研究\*

若井喜久哉  
堀尾行彦  
森川和雄

(北大結核研究所病理部)

北大結核研究所病理部 (指導 森川和雄助教授)

札幌医大病理学教室 (指導 新保幸太郎教授・小野江為則教授)

INAH と Tuberculin の併用療法に關しては、昭和28年日本病理学会總會で示説したので、Streptomycin と Tuberculin の併用療法について述べる。予じめ「ツ」反応陰性な事を確めた体重 300 g~500 g の健康海鼠 55 匹を使用、この各々に、仲野株人型結核菌  $1/100$  mg を右下腿部皮下に注入、約 6 週間を経てから 3 匹を屠殺し、十分な病変が現われたのをたしかめて後、之を放置群、ツベルクリン単独注射群、ストレプトマイシン単独注射群、ストレプトマイシン及びツベルクリン併用注射群の 4 群に分けた。ストレプトマイシンの注射は 10 mg を毎日皮下注射し、ツベルクリンは SOT 10 倍の液を 0.1 cc で始めその後 10 日毎に 0.1 cc 宛増量、40 日間にわたつて注射を続行し、各 10 日毎に「ツ」反応、体重測定、赤血球凝集価測定をなし、且つ各群 3~4 匹宛を屠殺し、肉眼的組織学的に判定した。

此の成績について述べると、体重では一般的に減少を示したものが多かつたが、特にツベルクリン注射例では 10 日目の減少が著しかつた。以後 20 日、30 日では併用例では減少は喰い止められ、ストマイ群では 30 日目に稍著しい減少を示した。

ツベルクリン反応に対しては、ツベルクリン注射例ではいずれも、抑制著明であつたが、ストマイ単独注射例でも概して抑制された。

赤血球凝集価の測定値ではツベルクリン単独注射例が 10 日目より高い凝集価を示めし、併用例が之に次いだ。ストマイ例及び放置例では上昇を示めさなかつた。

脾重量に対して、その体重比の結果では、併用例が終始最小値を示めしたが、ツベルクリン単用例もストマイ例に次いで増加が抑制され、放置例に比較すると著しい小値であつた。

10 日目の組織所見は、放置群では肺では広汎な乾酪壞死巣及び滲出炎、脾では殆んど全組織が結核巢化し、肝も多数の類上皮細胞結節をみとめ、リンパ節も乾酪巣と化し、結核菌はいずれの臓器でも強く陽性であつた。以下放置例では、20 日、40 日共に此の所見と大体同様である。

ツベルクリン単独注射群では、10 日目肺では乾酪壞死巣を認めるが、周辺部は充血強く、白血球等の浸潤が認められる。脾でも病巣周辺部に充血強く、腺腔内に白血球を認めた。

20 日目では、結核結節は一般に不正形で、結合織増殖し、線維性となる傾向があるが、充血は強い。30 日、40 日では結核巣は萎縮性となるが、肺では特に充血や滲出点を認めた場合が多い。結核菌は放置例に比較しては少なかつた。

ストマイ単独使用例では、10 日目肺では乾酪巣をみとめ、脾にも多数の類上皮細胞結節をみとめた。肝の病巣は萎縮性で、リンパ節病巣周辺部は稍結合織増生を示した。20 日目以後の所見では治癒傾向著明で、肺脾の結核結節の線維化、萎縮、硝子化がいずれの病巣にも認められ、リンパ節乾酪壞死巣も縮小し、厚い結合織で被包され、石灰化を認めた例もある。

併用例では、10 日目より特に肺では多数の結核結節は一般に縮小性である他、充血及び滲出炎を認めた。脾では結合織による被包化の外、周辺性充血強く、リンパ節病巣も縮小性である。20 日目肺では結核病巣は著しく非定型的となつて縮小し、脾の結核結節も著しく萎縮性で疎鬆となつておる。リンパ節病巣では硝子様化がみられた。結核菌は、多くの例で陰性となつた。

更に 40 日目になると病巣治癒は著明で、肺では僅かに

\* (本報告は日本病理學雜誌、第 42 卷 地方會號に掲載)

胞増殖と、胞腫の小円形細胞浸潤がみとめられ、脾では病巣の明らかなものを認めぬ例が多い。リンパ節病巣も結合織増生し、萎縮性治療像を認めた。肝の病巣は小円形細胞集団として病痕をのこすのみである。

以上の臨床的病理学的所見からすると、ストレプトマ

イシンとツベルクリンの併用は、明らかに治療を促進するものと言えよう。之の機序に関しては、ツベルクリンによる充血乃至は病巣周囲炎が薬剤の局所富化を起すことその他、ツベルクリン脱感作による抗体上昇—抵抗力増加がみづかつたものと考えられる。